小林 綾著

部落の女医

岩波新書

F 16

小林　綾　著

部落の女医

岩波新書

453

小林 綾

1928年滋賀県に生まれる
1949年京都府立医大附属女子専門部卒業

部落の女医　　岩波新書(青版) 453

1962年5月26日　第1刷発行 ©
1982年3月20日　第25刷発行

定価380円

著　者　小林　綾（こばやし あや）

発行者　緑川　亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社　製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　Printed in Japan

目次

Ⅰ　娘の頃のこと……1
妙子さんのことなど
結婚まで
Ⅱ　新米医者……17
巡回診療
宗吉つぁん
集　金
吉備部落のこと

世話人会
ふたたび吉備部落のこと
III 石の上に四年いて …… 73
ヒロポン中毒
まけてんか
電　話
婿入り
足立先生
部落の言葉
〃私の病院〃
IV 新築の大福香久山診療所 …… 103

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

診療所新築
診察室の戸
茂ちゃん
村中かゆい
おつきあい
同和教育
健康保険の監査
V 退職まで……151
Tさん
年末手当
市会議員選挙

保育所のお遊戯会
土庫診療所と前之薗先生
〝部落〟という言葉
みどりさんの話
診療所退職
〔付録〕部落診療所の発言……193
あとがき……205

I　娘の頃のこと

妙子さんのことなど

「未解放部落」のことを私がほんとうに知ったのは、結婚してからでした。それまでは何だかこわい人達のいる村があるとか、大きな声で話をしてもいけない人達の村があるということをぼんやりと知っていた程度のことでした。私が小学校の四年生の時、日支事変が始まり、女学校二年生で大東亜戦争に発展し、女子医専の二年生で終戦になるまで、娘の頃は激しい戦争の時代でした。学校でも家庭でも、新聞も、ラジオも戦争遂行に都合のいい事ばかり、ただただ御恵み深い天皇陛下の御為に死をもって国に殉ずると教えられました。七つボタンや桜や錨の制服に誇りを感じて、私の従兄や友達もつぎつぎと故郷を去って行きました。国家は天皇陛下御一人のものであり、天皇陛下は日本の国そのものであると教えられていたからです。そして私達はそれを疑うことすら知らなかったのです。今は何でも知る事ができますし、何でもみ

んなが知って、これからは一部の人達の都合によって、無理に事実がかくされたり、だまされたりする事のないように、社会の基礎を積極的にしっかりときずき上げておかなければならないと思います。けれども今でも未解放部落の事については、まだまだ話をするのに抵抗のある感じがさけられません。民主主義とか、人権尊重とかいわれながら、差別が今もそこにあるからです。つい百年にもならない以前に、武士という階級の人が、罪もない百姓や町人の首を理由もなく切り捨てた話のように、昔の物語にはなっていないからです。士農工商の四つの階級は今は跡かたもなくなりました。士族だからと威張る人もなければ、平民だからと悩む人もありませんが、上の天皇家と下の〃えた〃階級は今もやっぱり自由ではありません。未解放部落のことについては、私の娘の頃と同じような家庭も多いのではないかと思われます。

私は滋賀県の彦根高等女学校の四年生を修了するまで、南五個荘村で暮らしました。父は大阪で綿糸相場を商売にしていたそうですが、病弱だったので三十七歳の時、私が生まれて間もなく、すっかり仕事をやめて江州の田舎へ帰ってしまったのです。腸が悪いとかで夏でも湯たんぽを二つも入れたおふとんが用意されていました。お医者さんの薬やアイフの罐がたくさんあった事も覚えています。それでも寝ついているのではなく、方面委員(今の民生委員のような仕事)をしながら村の青年達を集めて〃力行会〃という会を作り、夜にはお謡や、詩吟や、横笛などを教えたり、農閑期には道路直しの勤労奉仕をしたりするのを道楽にして喜んでいました。

農繁期の忙しい時には、ひとりで琵琶(びわ)湖の岸や小川へ魚釣りに出かけました。琵琶湖にそそぐ川の上流には鮎がはねておりますし、下流の方には鮒やオイカワや鯰など、四季折々に父を楽しませました。父と母と姉と私と妹と女中さん一人に男衆さん一人の平凡な家庭でした。南五個荘村はその辺一帯の村々とともに、いわゆる近江商人の出身地で金持村といわれておりました。京都、大阪、東京などに店があって、主人達は都会に住み、すごく大きな田舎の屋敷には、盆、正月、法事などの他は番頭さんと女中さんだけしかおりません。そんな屋敷のあい間に小作百姓の小さな藁屋根がはさまっている村です。父は生活や、子供達の教育に責任の持てるだけのお金さえあれば、あとの人生は世の中のために尽さねばならない。自分が病弱なのは神様や

仏様がそのことを悟らせるための方便なのだと申しておりました。こうして主人が本宅にいるのは私の家だけでしたから、自然と村の相談事はなんでも私の家に持ち込まれていたようです。

小学校の三、四年の頃だったと思います。隣村の建具屋さんが、生活に困るので家を売るという相談がありました。ある日、

「そんな村の真中に〃えった〃がはいるとは無茶な事や。えらいことになってしまう。何とかならんやろか」

「〃えった〃に家を売るとは誰かに金を出せということや」

「話が決まってしまわんうちに何とかせなあかん」

などと、店の間からの話し声がきこえてきました。

「何やのや、今日の相談は？」

と、何でもききたがる私に、

「子供が聞く話やない。村の中にこわい人が住んだらかなんやろ。こんな事は学校でも誰にもしゃべったらあかんよ」

と、いかにも恐しそうに、母は私をたしなめました。とても重大なことのように思えて、私も黙ってしまいました。建具屋さんの家はどんなに解決されたのか、売られずにすみました。

それからこんな事もありました。姉が電車に乗って彦根の女学校に通うようになってから、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

遠い所のお友達も時々家へ遊びにくるようになり、姉はせっかく友達を連れて来ても私達妹が邪魔をするので、すぐに二階の自分の部屋へあがってしまいます。私はどんな人達かと興味を持って、女中さんがお茶やお菓子を持って行く時にわざわざ手伝って、のぞきに行きました。妙子さんと呼ばれている人は、みんなと同じセーラ服を着ていましたが、ウエストを細くしてどことなく垢抜けした色の白いきれいな人だと思いました。私は妙子さんが来ると、いつも姉の雑誌の『少女の友』に書いてある中原淳一の絵を思い出しました。姉は妙子さんの事を「京都にお姉さんがいて、きれいな物をいくらでも買って貰ってはる」とか、「うちはお姉さんがないさかい、妙子さんには負けてばっかりや」とか、「妙子さんは今日百円札を持ってはった」などと、母に吹聴していました。

「妙子さんはいくらきれいでお金持でも、かわいそうな身分や。あんたもそんなら妙子さんの家の子になってみ」

「妙子さんとも仲好うせんなあかんけんど、あんまり深うつきあわんときや」

などと母はいっておりました。そんな母の口ぶりに、私も何だか口をはさむ事ができず、きれいな妙子さんが遊びに来るのを、少しあこがれのような気持で待っていました。

私も電車に乗って女学校へ通うようになりますと、途中からドヤドヤと彦根の紡績会社に通う女工さんが乗る駅がありました。それは、何となく顔もよごれ、髪の毛もみだれた、色あせ

ていかにもじじむさい服装の人達でした。その駅の近くにはニカワ工場があって、風向きの工合では、ときどき何ともいえないいやな匂いが電車の中まではいってきます。同じ豊郷(とよさと)の駅から乗ってくる私の友達から、あの人達は〃四つ〃や、と聞かされました。ニカワを作っている村の人達で、妙子さんの家はその村一番の金持で肥料問屋であることを聞きました。そして女工さん達がかたまっているそばでは、どんな話をしていても、決してそちらを見てはいけないし大きな声で笑ってもいけない事をききました。私はそっと小声で教えてくれた友達の様子が、ひどく真剣だったので、家でも学校でもその事についてはずっと黙っておりましたし、それからは誰もそんな話をする人はありませんでした。

姉が女学校を卒業して東京の学校へ行くようになってから、戦争はだんだん激しくなり、私達女学生もれんげ草刈り、麦刈り、稲刈りと、出征兵士の留守家庭に勤労奉仕に出るようになりました。私も東京の学校へ行きたいと思いましたが、そろそろ始まった東京の空襲を母が心配してとめましたので、その年から募集された京都の府立医科大学付属女子専門部に入学することになりました。

結婚まで

終戦の年、姉は日本女子大学国文科の三年生、私は京都府立医科大学付属女子専門部の二年生でした。兵隊に出るような男のいない家庭ではありましたが、東京の空襲をきくたびに母はやせて白髪をふやしておりました。前途の見通しもつかないみじめな敗戦のため、学校は全部閉鎖され、私は京都の寮から、内地除隊になった大きな荷物の兵隊さん達にまじって、煙だらけの東山トンネルを無蓋車に乗って家へ帰りました。姉も二、三日すると東京からトランク一つ持って、汽車のデッキに立ち通しで夜の十一時頃に帰って来ました。敗戦を悲しむどころではありません。宝石から樋まで供出してしまっていても、家中みんなが無事に集まった事ばかりを喜んで、ほっとくつろいだ気持になりました。もうこれからはどんなになっても家中が一緒に暮らそうとばかり考えておりましたが、案外世の中が平静になって十月には方々の学校がふたたび開かれました。私達はすっかり退屈しておりましたので、学校の友達のだれかれの消息がなつかしくて、大よろこびでそれぞれの学校に帰りました。

私達のクラスは大体みんな集まりました。一年生はその時数人の人が学校をやめていました。はじめはみんな暗中摸索の状態でしたが、敗戦前とは違って、医科大学の学生さんや大学予科の生徒さん達と一緒に、学生自治会や文化サークルが作られて、はじめて聞く民主主義の意味をひとつひとつたしかめていきました。男女同権・学問の自由・言論の自由・宗教の自由・恋愛の自由などなど、ちょうど私は十七、八歳、自我の目ざめの年頃でしたし、大転換がおこなわ

れつつある社会の中で、田舎の父や母をおきざりにして急に大人になったように思われました。事情は東京の姉も同じで、それよりももっと激しかったのでしょう。たびたび私達は手紙で近況をしらせ合ってお互いの思想の変りようを相談したり、自慢し合ったりしました。中には女子大の校長排斥運動の事情や、卒業間際だけれども退学になるかも知れない、などという手紙もありました。父や母からはあまり過激にならないように、との手紙ばかりでした。姉は無事に卒業しましたが、東京から急に田舎に帰るのをいやがりますし、家では東京よりも近くの京都の方がいいので、京都大学の文学部の教室にはいって、京都で私と一緒に下宿することになりました。

しばらくすると、姉は同じ吉田山の第三高等学校の生徒さんと恋愛しました。ほとんど毎日その三高生は私達の下宿へ遊びに来ました。私達三人は夜おそくまで真剣にいろいろの事について話しました。恋愛についても徹底的に語り合いました。ある土曜日、きっと恋愛などとんでもないと叱りとばすであろう父と母を説得し、姉の美しい恋愛を支持する約束で、まず姉と私とふたりが田舎へ帰りました。父も母もやっぱり大反対です。静かで封建的な田舎では、その頃は恋愛なんて特別な物語のような事です。それを急に娘二人が口をそろえていい出したものですから、はじめは怒るよりもびっくりして冗談にまぎらわそうとしました。まだ男の友達の事を、ふだんに親達と話し合うような雰囲気はなかった時代ですから、話し出すまでも慎重

でしたし、話し出す限りは固い決心をしていました。それでつい真剣になると、明日にでも結婚するような口振りになってしまいました。そしてとうとう、親と子ははじめて重大な現実の問題にぶつかってしまったのです。毎日の新聞やラジオで、激しく変わった世の中の様子をただ他人様の事として眺めすごしていた父も母も、

「女の子やからとか、京都なら近いからとか思うて安心してたのに、とんでもない事をいうようになった」

「勉強勉強というてそんないやらしい恋愛の勉強なら京都へ行って貰わんでも結構どす」

「お姉ちゃんにはお父さんやお母さんが考えてるええお婿さんの話があるのやさかい。それでもまだ勉強中や思てお姉ちゃんにいうの遠慮してたくらいやのに」

「相手の子はまだこれから大学へ行かんならん身分やないか」

といろいろにたしなめられましたが、とうとう、

「その人はどこのお人や？　お家はどこや」

という所までこぎつけました。姉はまだその人の家へ行った事はありませんでした。まず父や母のゆるしを得てから、お互いの家へ行き来して交際するつもりだったのです。

「相手のおうちも知らんとそんな事は許せまへん。たとえその人がどんなにいい人でも、その親戚におおぜいの赤い目をしたきたならしい人がいて、私もお宅の親類になりましたと押

しかけて来たらお前はどうするのや」

「もしそんな事になったら、お姉ちゃん、あんたはお父さんも私も、ふたりの妹も世間にいられんようにしなはるのやな」

とおそろしそうにいいました。それは思いも及ばなかったひどい言葉でした。私達三人は、京都の下宿で貧富の差や、学歴の有無などで相手を選ぶのは功利的ないやしい事なのだ。恋愛は二人だけの純粋な感情で、すべてはその愛情のエネルギーで浄化され成長させられるものでなければならないと結論していました。〃恋愛は学問をする勇気をつける。恋愛はすべての愛情を深くする。恋愛は自由であり平等である。恋愛はみんなから祝福されねばならないし、祝福されるはずである。〃確信を持っていると思っていた私は、急に赤くただれた目をしたきたならしい人達、女学校時代に何ともいえないいやな匂いと一緒に豊郷の駅から電車に乗って来て、横見もできず、笑い声も立てられないように、何となしに私達を圧迫したあのグループの村の人達を思い出して、ぞっとさせられてしまいました。今まで姉と口をそろえて言い張っていた恋愛至上論が、いっぺんにぺちゃんこになってしまったという感じです。

「そんな人とちがう。そんな人とちがう。もしそんな親類があったかて、うちはかまへん。

家を出て行って帰ってこんようにするさかい、お母さんらに迷惑かけへんわ」

姉も涙を流しながらむきになって否定しました。父も自分でいい出した一番心配な言葉に、何

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb